●北陸

山田 正幸

北陸は1/1の能登震災に揺れた1年間であった。オーケストラ・アンサンブル金沢（以降OEK）のニューイヤーコンサート（1/8）は震災対応で早々に延期を決め，同プログラム，同指揮者で4/7に開催。指揮・ヴァイオリンのエンリコ・オノフリはバロックからモーツァルトSYMまでを繊細に大胆にOEKの魅力を引き出した。オノフリの弾き振りは奏者の自主性・積極性を引き出し，故岩城宏之の方向性を彷彿とさせる公演となった。2/6にOEKは復興支援公演を指揮川瀬賢太郎，松井慶太によるバッハ：アリア，ベートーヴェンSYM７番等を演奏し哀悼の意を表した。能登からの避難者を招待し，収入は全て義援金へ。

一方，コロナ禍で長引いていたマルク・ミンコフスキ（OEK桂冠指揮者）のベートーヴェン全交響曲シリーズ，最後の第九公演を3/15に行う。カリスマ性を持つ彼は要所を締，歌わせる雄大さは見事の一言。また，石川県立音楽堂の邦楽監督野村萬斎による「おもちゃ箱」はスペイン音楽と日本の能狂言が舞踏絡み合う音楽劇「恋は魔術師」を初演し，そのユニークさで，東広島市，鳥取市での引っ越し公演も成功。一方ガルガンチュア音楽祭は開催を躊躇したが，心のケア，勇気を持っていただく為！と開催を決定。テーマは「大西洋を渡る風！」英国，米国の音楽の祭典となった。オックスフォード・フィル，ロジェ・ワーグナー合唱団，国内から大阪フィル，OEK等々，クラシックから，ミュージカルまで…そして輪島の朝市をホール前で行い，能登の復興を支援。正に地域と共に生きるホールとなった。

2024年3月16日に北陸新幹線金沢～敦賀間開業！と銘打って，「ハーモニーホールふくい」ではウィーン「音楽の都」にちなんだコンサートや催し物を行った。5/30ウィーン少年合唱団，6/28 ウィーン・フィルコンマス「ヤメン・サーディ」ヴァイオリンリサイタル，10/24 ブンカサロンとして小宮正安（ヨーロッパ文化史研究家）の講演でウィーンの歴史と音楽で楽しませた。そして11/10 アンドリス・ネルソンス指揮　ウィーン・フィル公演　ショスタコービッチSYM 9，ドヴォルザークSYM 7等で満員の盛況。
そして当日リハーサルを県市内の生徒達に見せたのも流石。12/13 美浜町なびあすホールではフィルハーモニクス ウィーン＝ベルリン公演を室内楽に最も相応しいホールで行った。

武生国際音楽祭（9/1～9/8）では，未来を見つめるTAKEFUを作曲家細川俊夫音楽監督の下で創造性豊かな音楽祭を行う。テーマは「弦楽四重奏曲」現代音楽の最高峰のチーム，アルディッティ弦楽四重奏団，クァルテット・インテグラ，エール弦楽四重奏団が出演。演奏はウィーン古典楽派と新ウィーン楽派に重点，更にリゲティ，西村朗らの作品も演奏され充実していた。新幹線による県外観客は確かに増となったとの事。ふくいは全てがウィーンの森に包まれた。

富山県では9/14，15日「湯の街ふれあい音楽祭モーツァルト@宇奈月」を開催。山や川に囲まれた宇奈月がザルツブルグに似ていると感じた街の有志達がここはモーツァルトが似合う！との直感から始まったとの事。もう13年を経る音楽祭に成長。今年は温泉噴水広場にホルン奏者達のファンファーレから始まり，コーラス，室内楽，ブラスクインテット等，ソロ・デュオ等あらゆる楽器奏者達で街中をモーツァルト一色に染め上げた。フィナーレは市民オーケストラを元に宇奈月アマデウス祝祭管弦楽団を立ち上げ，モーツァルト作品と最後はレクイエム全曲を地元出身で広く活躍する声楽家達をソリストに，宇奈月アマデウス祝祭合唱団が，横島勝人の指揮で歌い上げた。このレクイエムを10年以上続けていて音楽祭の風物詩となっている。

一方，氷見市ではベートーヴェン第九番をウィーンで歌おうと元ドイツ歌劇場のテノール歌手だった澤武紀行が氷見第九合唱団に呼びかけ40名が7/14 ウィーン国立歌劇場で歌って経験を踏ませた。第九の初演から200年の記念行事であり，澤武自身がテノール歌手のソリストとして出演喝采を浴びた。この合唱団は毎年夏，冬の２回第九公演を地道に行なっている。10/14には能登慰問公演を行う等活発。激励のつもりが返って自分達に勇気を戴いたとの事。能登は強し！

山田正幸（やまだ・まさゆき）

昭和40年金沢大学卒。石川県音楽文化振興事業団，ガルガンチュア音楽祭シニアディレクター，全国共同制作オペラプロデューサー，日本劇場・音楽堂等協議会音楽部会顧問，オペラ「禅・ZEN」「滝の白糸」プロデュース，昭56中日教育賞，昭62珠洲市文化賞，平27石川テレビ賞，平28新日鉄住金音楽特別賞，平30北國文化賞，令元渡邊暁雄基金音楽特別賞，令2金沢市文化賞，令4文化庁長官表彰，ソニー音楽財団評議員